

P1-73 不妊治療による多胎児の増加がNICUの病床運用に与える影響

鹿児島市立病院周産期医療センター新生児科¹, 今給黎総合病院周産母子医療センター², 鹿児島市立病院³
丸山英樹¹, 茨 聡¹, 丸山有子², 徳久琢也¹, 藤江由夏¹, 角 健司¹, 松井貴子¹, 小野哲男¹, 福田美香¹, 田中信太郎¹, 北薮 雅¹, 蔵屋一枝³

【目的】不妊治療は、不妊症夫婦に福音をもたらし、出生率改善の方策として期待されている。しかし、不妊治療には、多胎妊娠などの問題点もある。多胎児の入院は、一度に複数のNICU病床を占有するため深刻な問題である。今回当院における多胎児のNICU入院状況と不妊治療の関係を検討したので報告する。【方法】1978年11月～2006年12月までに、当院新生児科で管理した多胎児の入院状況について後方視的に検討した。【成績】1. 入院総数は1987年の1,082人をピークに近年減少しており2005年2006年は入院総数が600人を下回っていた。しかしながら、多胎児入院数は年々増加を認め2003年、2004年には136人に達していた。2. 入院総数に占める多胎児の割合は、1980年代前半までは、入院総数の約5%であったが、2005年には20.6%に達していた。3. 1991年～2006年では、不妊治療による多胎児の割合は、1991年の11.1%から増加し、2004年には55.9%とピークに達し、その後は平衡状態である。4. 人口100万人、出生1万人に対し1日当たり多胎児管理に必要なNICU病床運用のシミュレーションを行うと、1990年～1994年ではNICU病床数1.1床、人工呼吸器数は0.7台、回復病床数は5.1床であった。1995年～2000年は、NICU病床数2.3床、人工呼吸器数1.0台、回復病床数4.1床と増加していた。2004年はNICU病床数4.3床、人工呼吸器数1.9台、回復病床数9.0床と急増していた。【結論】近年の不妊治療の進歩に伴い、多胎児のNICU入院数、また入院総数における多胎児の割合が増加していることが明らかとなった。今後、このような現状に対応できる、周産期医療システムの構築が必要と思われる。

P1-74 出生時体重から判断した二絨毛膜双胎妊婦の望ましい体重増加量の検討

東京医大
長谷川瑛, 芥川 修, 向田一憲, 永井 敦, 井坂恵一

【目的】双胎妊娠は単胎妊娠と比較して低出生体重時の合併率が高くハイリスク妊娠のひとつである。しかし妊娠期間における至適体重増加量についての指標は確立されていないのが現状である。そこで今回当院で経験した二絨毛膜双胎妊婦の出生時体重から妊娠中の至適体重増加量について後方視的検討を行った。【方法】当院で分娩管理を行い、合併症がなく両児ともAFD児を出生した二絨毛膜双胎妊婦43症例を対象とした。対象症例について非妊娠時体格ならびに妊娠中の体重増加について比較検討を行った。また単胎コントロール群として合併症がなく同期間に正常産となった妊婦の中から無作為に100症例を抽出した。【成績】妊娠前のBMIが普通の妊婦では双胎妊婦がAFD児を分娩するためには単胎妊婦に比較してより多くの体重増加(約13.2kg)が必要である。一方妊娠前のBMIが肥満である妊婦はAFD児を分娩するためには単胎妊婦とほぼ同等の体重増加量(約8.6kg)で十分であった。【結論】二絨毛膜双胎妊婦は単胎妊婦より多くのエネルギー摂取が必要であると考えられた。適切な栄養管理については今後の更なる検討が必要であると考えられた。

P1-75 当院周産期センターにおける双胎妊娠増加の影響

杏林大
鈴木雅代, 谷垣伸治, 井上慶子, 松尾典子, 橋本玲子, 伊藤路奈, 酒井啓治, 橋口和生, 岩下光利

【目的】双胎妊娠の増加は、母体及び新生児合併症、医療費、家族の経済的・精神的負担など周産期医療のあらゆる側面に影響を与えている。また、昨今、母体搬送の受け入れ先がない“たらいまわし”が社会問題となっている。当院周産期センターにおける母体搬送受け入れ率は年々低下しているが、その原因として双胎妊娠の増加があるかどうか検討した。【方法】2003年1月から2007年7月までに当院において分娩した双胎妊娠について、周産期センターに与える影響を検討した。【成績】当院全分娩において双胎分娩が占める割合は、2003年から2007年まで3.8%, 4.8%, 4.0%, 6.9%, 6.3%と有意に増加した($p < 0.001$)。双胎新生児の入院病棟は、通常新生児室が56.9%, 47.8%, 42.3%, 37.6%, 17.2%と有意に減少し、GCUへは37.9%, 49.3%, 23.1%, 35.5%, 44.8%, NICUへは5.2%, 2.9%, 34.6%, 26.9%, 37.9%と有意に増加した(各 $p < 0.01$)。双胎新生児の5年間の平均入院期間は、通常新生児室入院児が8.6日、GCUが31.6日、NICUが48.8日であった。双胎母体の81.2%が切迫早産にて入院を必要とし、平均入院期間は、4.7週、平均分娩週数は35週6日であった。【結論】双胎妊娠の増加は、NICU、GCUへの入院率及び入院日数を増加させ、母体搬送の受け入れ率を低下させる一因となること、また、母体管理も周産期センターの稼働を圧迫していることが示唆され、中間管理的な施設の必要性も考えられた。